

地球上に住む人は、太古から存在する自然放射線と、人工的な線源から出る放射線に日々さらされている。

光や音と異なり、ヒトには放射線を知覚する感覚機能がないために、放射線に被曝していることを知覚できない。しかし人は、レントゲンの発見以来、大量に被曝すると命にかかわる放射線を、その便利な性質のために、コントロールしつつ慎重に使用しようと工夫してきた。

自然放射線には、宇宙線、大地の岩石に含まれる放射性物質からの放射線、大気中に気体として放散されるラドンの放射線などがあるが、これらはコントロールが難しい。わが国のように医療が普及した国では、主な人工放射線源として、X線撮影装置、治療用放射線照射装置、核医学で使用する放射性医薬品や密封線源など、医療用のものがあげられる。

看護師と患者の両方の視点から

自然放射線のようにだれもが被曝する放射線のほかに、放射線を利用する職業に就いている人が仕事上受ける被曝がある。その代表が医療職である。

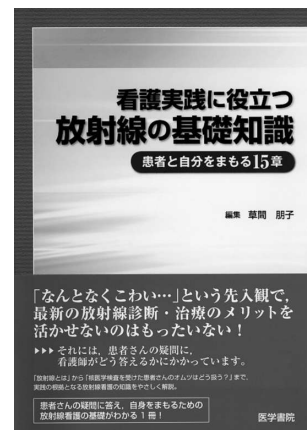
本書『看護実践に役立つ放射線の基礎知識』は、医療の場での放射線被曝を、看護師が職業上受ける被曝と、一般の人が患者として受ける被曝の両方の視点から考えている。医療の場にはどのような放射線源や放射線があるのか、看護師が患者と自分自身の安全を守りつつケアするにはどうしたらよいか、患者の放射線に関するさまざまな疑問や不安にどう答えたらよいか、などについて考える際の信頼できる参考書となっている。

基礎知識から具体的なケアまで

本書には、放射線の基礎的な知識から、診療の際の環境中の放射線の量にもとづく具体的なケアの方法まで、根拠にもとづいて丁寧に記述されている。例えば、核医学検査をする患者のケアに使うオムツやシーツはどう扱うか、病室でポータブルX線検査を受ける患者の介助はどうしたらよいかなど、実測値を示して具体的に助言している。

わが国は他国に比べて医療放射線による被曝線量が多い。高度な医療が普及し、胸部X線検査やCTなどによる画像診断や放射線治療が日常的に行なわれている現状を反映している。放射線は人体や物質の内部を画像するという便利な性質があり、また、がん細胞のような増殖力の強い細胞を正常な細胞よりも強く傷つける性質があるため、医療に不可欠の道具になっている。さらに、毎年のように健診を受ける制度があるので、これも国民全体の被曝線量を高める原因になっている。

本書の執筆者は、看護の教育・研究に加えて、放射線の安全防護に関する研究者として、一貫して医療被曝の低減を主張し、国際的にも活躍してこられた方たちである。本書は簡単に持ち歩ける大きさであるが、盛られている内容は新しく、充実していて、各項目の内容が精選されている。この一冊を辞書のように手もとに置けば、大抵の疑問には答えられるように構成されている。このような本が出版されたことは放射線に関わる看護職にとって大変心強いことである。



看護実践に役立つ
放射線の基礎知識
患者と自分をまもる 15 章
草間朋子編集
定価 2520 円
(本体 2400 円 + 税 5%)
医学書院
TEL. 03-3801-5657

医療における放射線について 考える際の信頼できる教科書

別所遊子 神奈川県立保健福祉大学看護学科教授・学科長

評
BOOK